

□特集2

KOBE & MY LIFE

北野町の 異人館訪問

小林 秀雄氏邸

秋雨の坂道を登りつめて、北野町の小林邸の門を入ると、目印の楠の太木が二本立っています。車まわしの広場の棕櫚の植込の側には十三重の石塔が又目をひるがえす。庭の隅にどっしりとした朝鮮灯籠が置かれている。白ペンキの独逸下見板張の外壁をまわりこむと、南側に美しく刈り込まれた桎が植えられ、鶏卵大の白い玉石が敷詰められ、雨にうたれて光っています。大きなガラリの両開扉を入ると玄関です。ステンドグラスの欄間と、緑青の平安調のランタンが天井から下り、これが奇妙に調和しています。玄関ホールから左手にある客間に入ると、良く手入れのいきとどいた古い、びくともしていないサクラの椅子が置かれ、部屋の正面がベイウインドになっています。壁には一五〇号ぐらいの浜辺の生活と大阪湾を描いた横長の日本画がスタンウェイのグラランドピアノの後に掛っています。

す。部屋隅には小さいがしっかりとした暖炉が組込まれ、高いしっくい塗の天井がカーブを切って壁に落ちて来て薄緑のペンキ塗の腰板から大きな巾木を介して、黒檀の縁どりのある寄木張の床はワックスで磨き込まれています。しばらくすると白髪的小林氏が出ていらつしやいました。現在では奥様と家政婦さんの三人暮らしで大きな屋敷にしては少し寂しいのですが、かつては五人の子供達と多



小林さんご夫妻

数のお手伝さんが住まれた賑やかな生活が想像できます。小林氏は大正一四年に、ロンドン・スクール・オブ・エコノミックス(L・S・E)に留学なさり、良き時代の英国の生活を経験し、完全にこの洋館の住いに合った生活をなさっています。神戸に住むならば一度は北野町の山際の港の見える異人館で生活して見たいと思います。が、完全に洋式化した、ホテルのような生活は仲々出来ないものです。

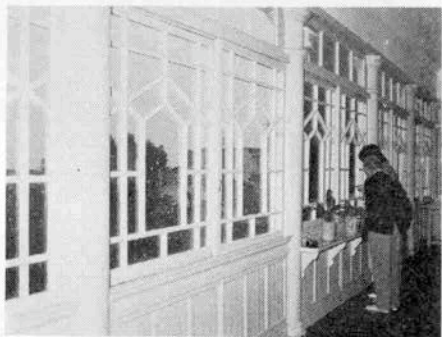
小林氏は昭和一九年から和室のない洋式の生活をなさっています。今日はカワウソのL・S・Eのワッペンに付いた紺のスーツにL・S・Eのネクタイをしめて私達を案内して下さいました。住いとは

住人の性格が出るものです。住人の居ない住いは、それがいくら丁寧に管理されていても死んだものです。やはり住いと住人が一体となり、生活がなされ、初めて生きた住いになると思います。客間の向いのダイニングルームにはサクラのダイニングセットと応接セットが置かれ、仏製エラルの燭台の付いたピアノは、チェンバロに似た甘い音色を出します。ピアノはやはり広くて、天井の高い部屋で弾き、聞くと又一段と良いものです。壁には英国をしのばせるピクベンの銅のエッチングや、L・S・Eの真鍮のワッペンが掛り、背の高い窓ががちりと大きな扉のせり出の楣や枠の彫物に西洋の古き良き時代への郷愁が込められています。めずらしいスコットランドのリキニールを御馳走になり、しかも2階のリビングルームやベットルームそれに眺望の良いサンルーム等を丁寧に案内していただきました。ほのぼのとしたこの住いがいつまでも生き続けることを心から望んでいます。

武田 則明(武田建築設計事務所)



小林氏邸の応接間、左が武田レポーター



サンルーム、昔はここから港が見えた



小林氏自室、L・E・S時代の写真が飾ってある
左：小林秀雄邸前面

□特集2

KOBE & MY LIFE

明治の英国 が息づく

六甲山の坂野家別荘

赤レンガを、がっしり積み上げたマントルピース。

アイルランドの原野を走る野牛の群れを描いた三十号のエッチングが、その上の壁を占める。

まわりには四枚羽の黒く古めかしい扇風機、同じく古風な柱時計。中央には灯油ランプ……

今様にいえば4LDKの、ダイニングに当たる部分に、そんな舞台装置が生きている。

「終戦直後、もう五年しかもない、っていわれたんですよ。それが、つぶれもせずに三十年もたってしまった……」

夫人の、坂野惇子^{ぼのあつこ}さんは、その調度品の一つひとつに愛着をこめて紹介して下さる。

神戸で生まれた「育児産業」株主アミリアを主宰する坂野一家の、ここは六甲山頂の別荘とでもいおうか。「本宅」が阪急御影の近くにあるのでこちらは「山の家」と呼ばれている。

夏、一家は、おもにここで過ごす。にぎにぎしく下界をみおろす、という山荘ではない。深い杉木立に囲まれて、ゆったりと静かな時間をたのしむ。いかにも、そういう感じの構えである。

銀行家だった坂野通夫さん（フアミリア社長）の父親が、英国人アーサ氏からの別荘を買いうけたのは大正九年。六甲山頂が開発されて、まだ何年もたっていなかったときだ。



左上にランプがみえるダイニングルーム

いまに至るまで、その骨格はほとんど手を加えていない。つまり「明治の英国」が、そのままだに生き残っている、ともいえそうだ。

ダイニングをはさんで、ベッドルームが二つずつ。その四室は、ダイニングのランプが天窓を通して光を送る。

ペランダ風のサンルームには、茶に変色した籐椅子が並んでいる。ふろは鉄のカマの、いわゆる

五右エ門ぶろなのである。

貴族院議員などという夫人の先代の身分をひっぱり出すまでもあるまい。生産するベビー用品のすべてが、重厚で、堅実な「フアミリア」。その主宰者一家に、いかにもふさわしい「山の家」というべきだろう。

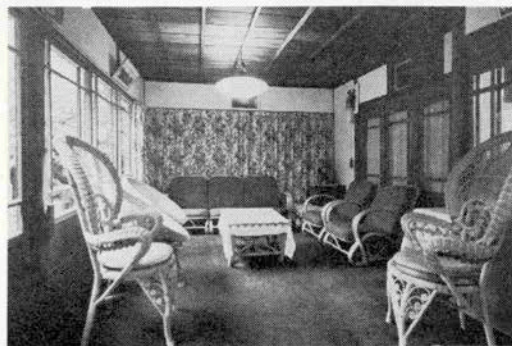
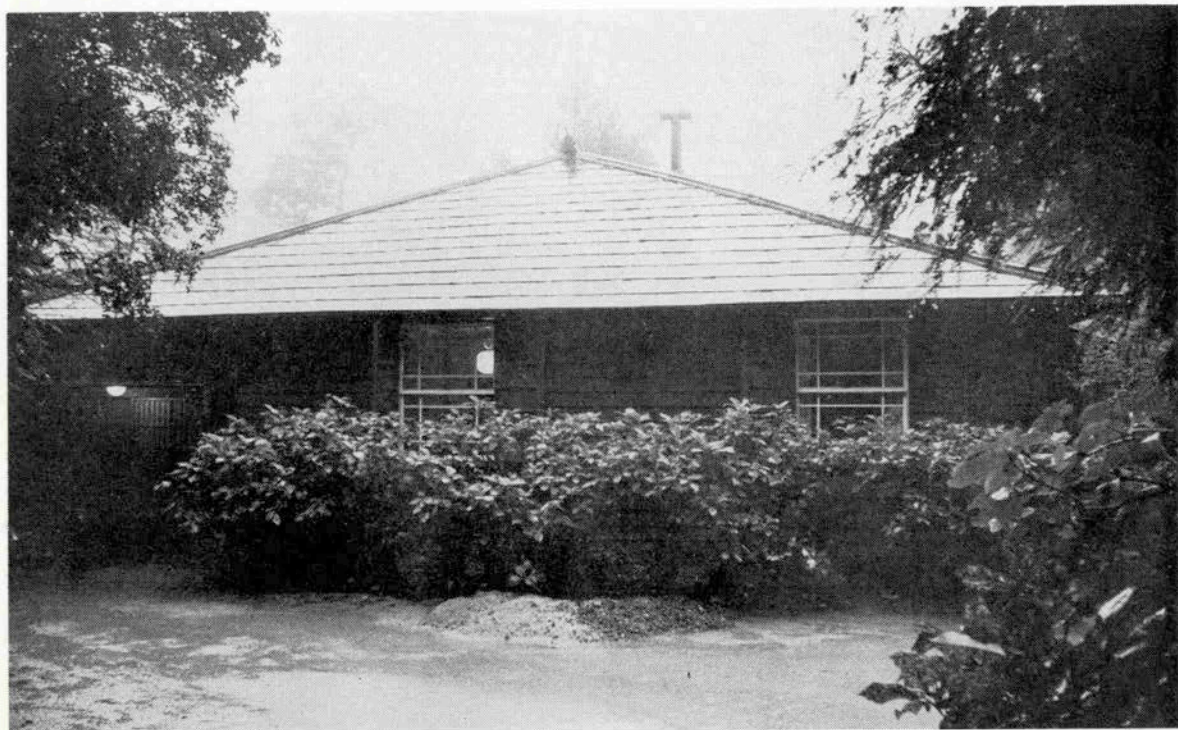
「ムダは排すべきだが、第三者にも恩恵を及ぼすぜいたくはよろしい」という惇子さんの実家の家風もまた、ここに生きているように思える。

二代にわたった植林の成果が、三千坪の敷地をおおっている。杉は、もう人ひとりでは抱えきれないほどの成長をみせている。

「こんなところも空襲でやられてましてねえ、焼イ弾を十七発も受けたんですよ」

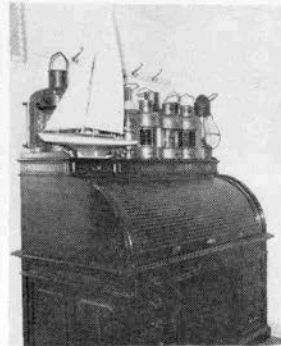
その焦げた跡をペランダに見た。戦後、引揚げてきた通夫さんが、休みごとに通って、修復したのだという。

異国趣味、そして年輪。いや、なによりも貴重なのは、住むひとの愛情だろう。われわれ庶民からみれば、別荘などはぜいたくきわまりないシロモノだが、ここにはそういう反感を寄せつけない暖かさ、素朴さがあふれているように思えてならなかった。

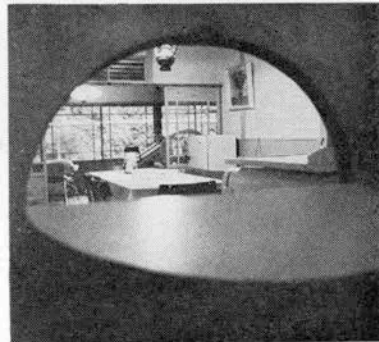


上：あじさいに囲まれた山荘全景

広いベランダに籐椅子が



古いキャビネット型机とご主人のコレクションの一部



英国人は躰が厳しかった。お手伝いさんはここまできれない

モダンと

大地の調和

中西勝郎を訪ねて

「白い壁の外観はやはり、モロッコ風ということですか」と尋ねたら、画伯は「そんな違う、最初は壁面は手焼の練瓦でビッシリやる思うたんやが、諸物価の値上がりで、白いままになったんや」その白壁に車輪が埋めてある。

「あれはナ。大八車の車輪や」なるほど。「あの黒いシヤベルとその帯のところの緑色、あれは自慢の作品やデ」これが出窓の飾り。こういった調子のもが、位置がいいのか、ピタリときまっているから不思議だ。

バルコニー風の屋根のところに形のいい「すすき」が生えていた。家を建て替えようと覚悟をきめたのが四八年四月。竣工したのが四九年四月。つまり一年がかりで完成したという。

設計は、画伯の弟子である佐川満男の兄である佐川俊吉氏のもの。そして、建築中に中西ご夫妻はモロッコに行ってしまった。そ

して、海外から「あの柱をはずして、あそこはこうなおして」という度に設計図を書きなのおさねばならなかった、と伝え聞く。

「まあ、この家は、僕とお咲の思いどおりにつくったんや」

それはそうだろうと思う。が、佐川さんの困ったような顔が浮んでおかしかった。

まさに豪放磊落、のように見えるがそうでない。どことなく神経がピリピリするような構えがあ



居間で、中西画伯

る。やはり画家の家のものだ。

とにかく家の中には、モロッコ、スペイン、アフガニスタンなどの陶器が、中西好みのもが並べられている。

「何にしろ、僕はなあ、キチント整理してあるというのは、何んとしても絶えられん性分なんや」

確かに、いろいろな空間に遊びがたっぷりこまれている。

しかし、空調器具は黒い木の飾り棚でおおわれ、そこには、小物

のコレクションがいっぱい並べられていて、絶対気がつかないようになっていた。

「居間は出来るだけ天井を高くとつてあるんや、この方が落ちつくからナ」

「それにしても、分厚い、丈夫そうな絨緞ですね」といったら、

「どうや、これがあのモロッコで出来るんや、凄く模様やろ」

それこそ、手織りの重みのある色調とデザイン絨緞である。そして居間という居間には、モロッコ製の絨緞が敷きつめられ、しつくりとした落ちついた調子である。

「ああ、うちで一番ええのは便所や、このタイルはポルトガルの手づくりや、ええ色やなあ」

つまりサラセン模様の不思議な冴えた色あいのもの。

この中西邸母家に趣きを異にした部屋が二つある。咲子夫人のお部屋である。この部屋はキチンと綺麗になっているのですぐ判る。

とにかく、家全体が美術作品で埋められている。美術品ではない。あらゆるスペースが中西画伯の作品なのだろう。二階の部屋からの眺望はすばらしい。灘五郷を見下ろす、鴨子ヶ原の高台のいいところなのだ。母屋の外にアトリエと画伯が誇る自称、民俗資料博物館のある和室「無字庵」がある。



中西邸全景



緑が美しい玄関アプローチ



ご自慢のトイレ



2階和室で一弦琴を楽しむ咲子夫人



なぜか太鼓などがある別棟のアトリエ

□特集2

KOBE & MY LIFE

近代的な 木造建築

ジェームズ山の高田邸

塩屋駅の山手に「ジェームズ山」とよばれる小高い丘がある。

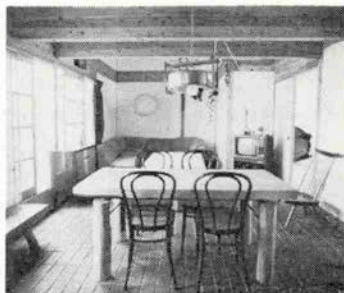
かつて、イギリス人ウイリアム・ジェームズ氏が戦争で得た巨万の富をつぎこんで開拓し、現在は外国人たちの瀟洒な住宅が立並ぶエキゾチックな雰囲気につつまれている。ここからの明石海峡の眺望は抜群によく、私の住んでいる須磨の高倉台からはそう遠くないので、天気の良い日などはよくここに足を運ぶ。

このジェームズ山のすぐ下にこの春完成した高田忍郎がある。

外囲りが木材で格子のように囲まれているので一見奇異な感じを受ける。玄関のトビラを開けて中に入れていただくと、一瞬ブーンと木の香りが鼻をついて快よい。それもそのはず、この高田さんのお宅は家屋全体が木材をむき出しのまま使っており、山や高原のロッジのような感じである。

設計は神戸の「都市・計画・設計

研究所」と四国の「山本長水建築事務所」が共同で設計し、昨年十一月に着工、今年の三月末に完成した。何でもこの家屋の基調をなしている木材は、わざわざ四国の山から切り出し、二カ月ほど乾燥させてから神戸までもってきて組み立てたそう。今ハヤリの新建材は一切使用せず、すべてホンモノの木を素材につくられている家など今どきめったにないだろう。さぞ高くついたらだろうに、と余



一階ダイニングルーム

計な事を心配したが、施工主も赤字を覚悟でやってくれたのでそう高くもなかったそうである。いかにも家をつくるのが好きな人たちが集まってつくった家らしい。

一階の居間から屋根裏まで吹き抜けになっているのでずいぶん高く感じられる。家屋の構造は何となく京都や飛騨の高山の古い家の建築に似ているが、レンガの床がモダンな感じを出しており、純日本風な様式の中にも近代的な感覚

がミックスされているところがおもしろい。

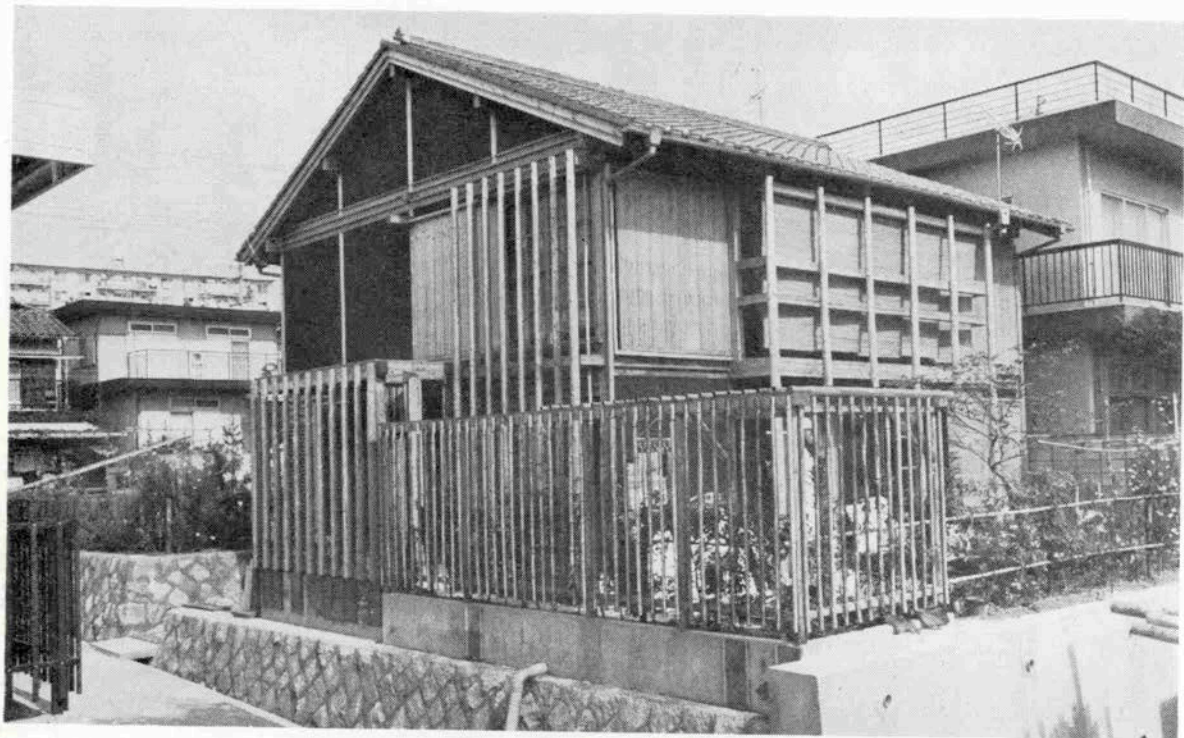
室内のインテリアも民芸調の家具があれば、現代風の照明器具ありで、それぞれの部屋のフンイキや構造で変えてある。

「よくまあこんなおうちをつくられましたね」とよくいわれるそう。建築家が頭の中で描いた奇抜な家というものは、そこで毎日寝起きして生活するものにとってはかならずしも便利で暮しやすい家とはいえない場合もあるが、半年暮してみて高田さんは「まあまあです。夏は涼しかったけれども冬はどうでしょうね。壁が全部木材なので温かい気はしますけど」とまずまずの感想。

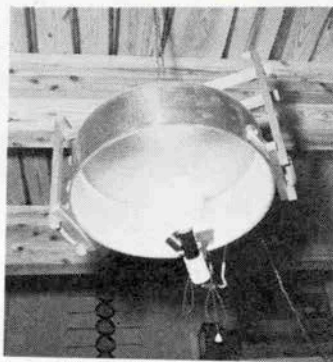
「都市住宅 一九七五夏号」にこの高田さんの住宅が紹介されており、そこに「この住宅のテーマは△木△をとおして、住まいと町並みと山を交流させることにあります」とある。

このネライが成功したかどうかは私にはわからないが、コンクリート文明にひたりきっている現代人の一人である私には、久しぶりの木の感触と香りが何ともいえず温かく、新鮮なものに感じられた。

橋本 明(八木) 家庭養護促進協会事務局長

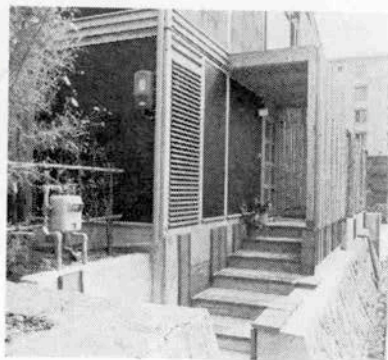


上：高田邸全景



ふきぬけから見た居間

白木がきれいな天井と変わった電気の笠



玄関は竹の覆いで囲まれている

□特集2

KOBE & MY LIFE

すまい手の心の表現

石阪春生邸を訪ねて

一つの敷地の中に各々が、別棟となっていて今時、街中には優雅なすまい方である。御両親のすまいされる母屋、倉を改造したアトリエとサロン、そのまま出番を待っている倉、そして新しく増改築されたすまい。今回拝見出来たのは、アトリエとそれに附属するサロンです。写真に見るように白壁に濃い木肌のとりあわせ、小屋組を見せた高い天井、骨とうものの椅子や、自らデザインして造らせた飾り棚、そこ、ここに置かれている小物や、その配置にさえ、あるじのすみずみまでゆきわたった美意識の世界が感じられます。どれもこれも、なにか懐しく暖かいそう、ふるさとみたいなもの、人々の手アカのしみついたようなモノ、クラシックな様式美、そして今や民芸調と呼ばれる日本の造り、それは誰もが持っているふる里願望をくすぐるに充分です。しかしこれを即まねすることは出来

ません。ここには本物の倉を持つ強みがあります。厳しい自然と対決して風土と人間の知恵が、つくられた空間と素材が織りなす本物の味があります。それは現在を生きている大方の人々にとって、もはや得がたい味になってしまいました。このような場を持つ幸をうらやましく思うし、可能なかぎり残して生きつづけさせていることを見るのはうれしいことです。しかしそれは同じものを現在にお



アトリエのそばにある応接間で話す
石阪春生画伯と高月さん

いて造ることは全く次元のちがう事です。建てものを建て自らそこにすまいし、仕事し、物を納めるためには、現代の、未来に通じる風土と人間の知恵を最大限に集めたものになってくるのは当然のことでしょう。新しい空間のとり方、新しい素材の扱い方、新しい技術、性能材、ただ新しいということが、人間性不在の建物、すまいというふうにつながりかねない現代の建築家の多くの作品は、新

しい可能性に対するたえまない人間の努力や挑戦とは別のものだという弁解があまり力強くないのは、ある意味での反省の必要を私自身の周りにも認めるからです。それは過性のモノでなく、時間と空間の経緯に耐えて、本物の味を伝えられるモノをつくり出したいという思いが、最近のオーナーの、すまいや暮し方に対するバックボーンのなさにある面では屈しつたりわっている事のもどかしさを含めて画家であるあるじの言葉に考えさせられる面があるからです。そしてあるじ自ら指揮をとって造りあげた新しいすまいも種々な矛盾をはらんで出来あがったように思います。内部は拝見しておりませんが、やはり、アルミサッシ、鉄柵、タイル貼、etc、そこには本物の味を御存知の作者にして新しい素材や技術との出会いへのもどかしさが見られます。恐らくこのすまいは、時間を追ってつけ足され、あるいは削られ変化してゆくことでしょう。そして、すまいがすまい手の心や暮しの表現そのものとなってゆくプロセスで多くの素晴らしい会話があるじ自身の内部で、共にすまいする家族と、又訪れる人々との間で展開されてゆくとしたら、それはそれで楽しく素晴らしいことです。

高月昭子△建築家・計画工房DNA△



上：石阪邸全景



アトリエとサロンの外観 天井の梁が歴史を忍ばせる倉庫を改造したアトリエ



アトリエにつづくサロン

応接間は 緑の多い庭 渡辺邸を訪ねて

朝からの雨が上った秋の午後である。市バス三宮—阪急六甲路線の停留所、野崎通五丁目から小さな坂道を上ってゆく。このあたり、布引から東へ、青谷、篠原にかけては、細くて長い坂道がとても多い。その坂道の頂上からふり返って見下ると、坂の両側にぎっしりと並んだ建物の間にはさまれた一直線の狭い視野の一番奥に海が見つかる。よく神戸の街は海と山とはさまれてと表現されるが、この眺めからもまさにその通りであると感じさせられる。また逆に海と山との距離が意外に長いような気もしてくるので不思議である。この坂道（バス停からわずか二百メートルぐらいであるが、ちょっとした運動になる）を登ったつきあたりを右に曲ったところにあるのがこの渡辺邸。

立派な門構えにつづく石段を登ったとたん、午後の光に輝く芝生が目に入る。緑一面の柔かいじゅ

うたんのようである。住宅が難然と密集したこの付近にあって一段高くなった渡辺邸からは隣近所の空気が隔絶されて全く感じられない。渡辺さんは「私の家の応接間はいつもこの庭なんです」とこやかに語る。庭のテラスに、あるいは芝生の上にじかに座って来客に接するそうであるが、この日は雨模様のために庭で談じることができない。不運なことだと残念に思いながら靴を脱ぐ。



応接間で渡辺さんご夫妻

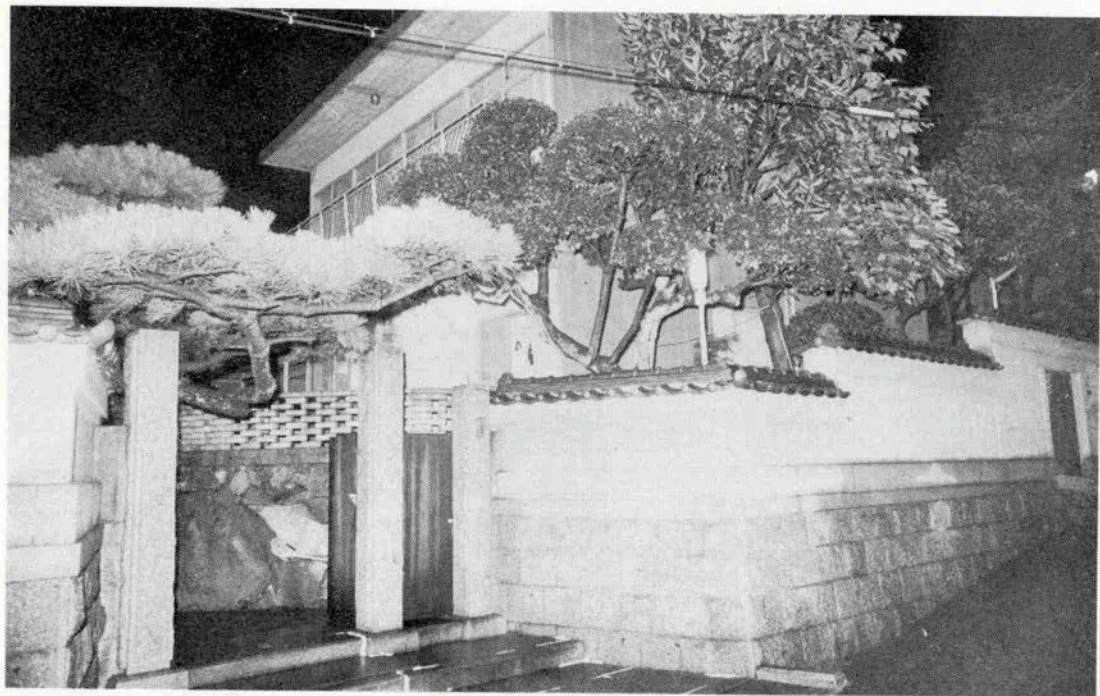
渡辺邸の主である渡辺利雄さんは八洋服の粋、渡辺Vの会長。多忙の人。日本近代洋服発祥の地神戸にあって日本の洋服界での貢献者。昨年10月、神戸東遊園地に完成した「日本近代洋服発祥の地顕彰碑」（環境造形Q制作）の建立に尽力された人でもある。通された応接間に小さな机がかけられてある。「九時終業。十時就寝」。渡辺さんの健康法のひとつだそうである。早く寝る。早く起きる。朝

には裏の畑に出かけ、土に触れる。いろんな野菜が栽培されている。「イノシシが荒して困る」そうである。

応接間。さっきの緑の芝生の庭に接している。

改めて庭を眺めてみると、端にデッキカイチの木が茂る。雄大である。手前には一日のうちに何回も花の色が変化する醉芙蓉。海からの秋風がそんな緑の中を吹きぬけてくる。涼しい風。日が暮れるのが早い。この応接間から庭越しに、神戸の街、港に行き交う船に灯がともるのがよくわかる。貿易センタービルにも灯がついた。何ともいえない神戸の味である。全く飽きない。

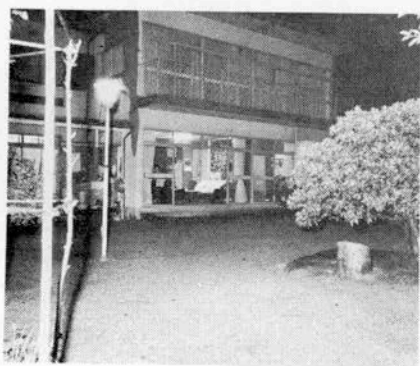
坂道を上ったところの門構え、そして石段から玄関。素晴らしい庭と応接間。それだけしか拝見していないが、充分。静岡出身の渡辺さんがフトしたきっかけで神戸に移り住んで永い。神戸で生れ育った生粋ではないかもしれないが、渡辺さんのように自然を愛し、人間を愛し、神戸のためになることなら喜んで行動する人、神戸でこのような暮しをする人が本当の神戸っ子であるような気がしてならない。



白い塙と緑が美しい渡辺邸全景



門からのアプローチ



庭から見た居間



手入れのゆき届いた広い庭

コンクリートづくりのたてもの
たとえばオフィス街のビル、その
特に夜景など人の気配のしない画
一的な蛍光灯のあかりが、都会の
夜を感じさせてくれるなら、同じ
コンクリートづくりのマンション
や団地から、もれる光が赤や黄、
青と各戸いろいろ違う光（何のこ
とはないカーテンが色々違うから
そう見えるだけなのだが）で、そ
こに人の住む場を感じさせてく
れ、私などいつもホッとする。さ
しずめ〇さん宅からはオレンジ色
の光が外から見えるのではないか
……そんな思いのする快い住まい
だ。

商社勤務のご主人の関係で十年
あまりのニューヨーク暮らし。そ
して日本へ帰って来てこのマンシ
ョンへ。「最初は狭くて狭くて……
でも庭いじりからは解放されま
したけど……」と話してくださる奥
さん。マンションなど外観は画一
だが、中のインテリアでずい分、

一軒一軒のイメージが違ってい
る。〇さん宅は、コンクリートの
柱の厚みにピッタリ合わせた作り
付けの食器棚や、本棚、収納用に
充分大きさと厚さをとったタンス。
壁にアクセントと実用を兼ねた
電話台と、作り付けの家具が多く、
生活の知恵を充分に生かした
インテリアで狭さを感じさせてく
れない。それ以上に、これらのチ
ーク材の何げないけど味のある茶
色と、食卓の上のペンダントの
赤。クッションのオレンジの縞と



居間はダイニングルームとつづいてワン
ルームのようにになっている

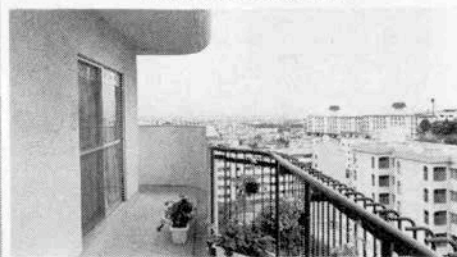
ニュージョーランド製のオレンジが
かったループのカーペットという
ように、ご家族のセンスで選んだ
インテリアの、カラーコーディネート
イトのみごとに感心させられる
。「このマンションはベランダに
物を干してはいけないうって協定が
あるんです。住む人の協力で団地
のスラム化なんて言われますけど
美観をそこなわないようにしよう

って。この隣の方には億のつくマ
ンションでなくオクシオンがある
んですよ。」なる程、窓からは、
あちこちにマンションが建ってい
るのがよく見える。〇邸は6階な
ので非常に見晴らしもよい。丁度
コーナーにあたるのでベランダが
コの字型に付いてあり、よけい広
く感じさせてくれる。

ご主人のお勤めの関係で外人の
お客様も多く「でもニューヨーク
時代は夫婦同伴というのが多くて
大変でしたけど、このごろは鍵一
つかけると安心な生活なのでつい
ついサボってしまつて……」とお
つしやるが、アメリカで生まれ、
今はもう中学生というお嬢さんと
もども、カーペンターズの大ファ
ンというからとてもお若い。家族
は他に、大学生の息子さんと四
人。子供部屋はそれぞれの趣味を
生かして、息子さんの部屋はブル
ー系でクールに。お嬢さんの部屋
はスヌービー調に。和室と台所と
納戸と……狭い狭いとおつしやる
が、部屋数も多く、これでは掃除
も大変そう。「そうなんですよ。
主婦業というの忙しく、掃除も
やり出すとずい分、時間がかかる
のでね」お料理もお得意な奥さ
ま。この奥さまの印象がまたアレ
ンジのように明るくステキでし
た。



これも、つくりつけの電話台



ベランダが広く、見はらしもいい



左：玄関から奥をみる

台所から居間をのぞく

住まいの

一一〇番

〈チェックポイント〉

人もすまいも「かつきえかつむすぶ」うたかたのようなものとする鴨長明の『方丈記』をひっぱりだすまでもなく、住居については「浮世の仮すまい」とする淡泊なとりあげ方が古来日本人の住居観の底につよく流れていました。

しかし時は流れうたかたの住まいではなく世はマイホーム時代。よい環境に、よりよい住宅を建てたいと願うのは誰も同じでしょう。これから住宅を建てようとしている人のために、見落としてはならないチェックポイントをあげてみました。

まず、どんな住宅を建てたいか団らんを中心とした生活のための家を、いや合理的な家を、と目的はさまざまですが、基本的なチェックポイントは同じはず。予算に合わせ、よりよいK O B E L I F Eを楽しんでください。

土地 持ち主を調べる。↓法務局

正しく造成、又は区画表示された土地か？聞き合せ、図面を見る。業者登録だけでは危険です。

宅地の場合、市役所の都市計画課へ問い合せ。

市役所 都市計画課は土地利用、計画道路などを担当。建築課は土木、宅地などの

規制について担当しています。

建物について

①設計 設計事務所―県に事務所として登録してるものに依頼する。市役所 建築審査課へ確認申請すること。

②見積 施工業者も業者登録している所へ。

見積単価↓建築物価標を見当づける。

③建築 市又は県の建築指導課に相談する。必ず施工業者と利害関係のない人に頼む。工事の管理は一級又は二級建築士に。

建築についての相談窓口は市や県の他に次のところがあります。

①神戸市住宅相談

②神戸市整備公社

③住友信託銀行すまいの設計室

④新聞会館ハウジングセンター

⑤松下電工

⑥各デパート（大丸、そごう、三越など）

⑦星電社などへ

インテリア相談は

各デパート

家具屋さん

各インテリアショップで。

住まいの二一〇番

ご存知ですか 便利な施設が あります

■神戸市民生活協同組合「生活改善事業課」

神戸市市田区江戸町98

市民生活協会館一階

電話 三九一四五四

午前九時から午後五時まで

「楽しい家庭づくりは明るい住まいから」をキャッチフレーズに、神戸市民生活協（通称市民生活）に「生活改善事業課」というのがあります。この課ができて10年。最初は便利大工程度のものから始まったのが、今では新築、増、改築とマイホームづくりまでやっている。年に取り扱う件数は、大小とりまけて約四〇〇件。

台風シーズンには、雨戸の修理や雨もりの修理が大変なにぎわいをみせるそうだが、電話一本で、相談や下見に来てくれ、仕事の大小問わず動いてくれるのがこの特長といえる。

今は不景気だけに、新築よりも増、改築の申し込みが多いそうだが、まず電話（あるいは直接窓口まで相談に行く）取り引き業者三社が見積りを出し、依頼者との

合意の上で工事に取りかかるシステム。

「ころばぬ先のつえ」大切なマイホームを今のうちに治療しておこうという場合や壁や塀の修理、改善など小さい工事から、みどりのある生活「垣根を造ること、樹木の葉刈り、芝生の手入れ、庭全体の造成まで引き受けてくれる。

また経済面のサービスとして、便利な貸付金制度があり、工事費の50%（最高50万円まで）無担保で融資もしてくれます。ただし、市民生活協だけに、利用者は会員、市内に居住の人、市内に勤務先を持つ人に限られます。見積調査料は千円。

市民生活協はこの「生活改善事業課」の他に結婚式場や色んな部門があるが、この「生活」のスタッフは三人。この部門があることを知らない方が多いんじゃないか？と思うんです。毎日の生活で不便を感じることやら、ちよっと手を加えたらまだまだ：なんていうことが多いと思います。そんなものために最初は便利大工みたいなものから出発したんですから、どんな小さなことでも相談してほしいですね」となかなか意欲的だ。

■兵庫県宮崎建築協同組合

神戸市東灘区住吉町中島四三九の五

電話 八二一〇二一〇、八二一〇二六七

「ハイ、ヒヤクトウバン」という電話番号を持つこの兵庫宮崎はその名もズバリ、住まいの二一〇番。こも市民生活協と同様に、電話一本で用が済みます。取り扱う工事、雨もり、瓦、トタン、樋ペランダ、屋上、内外壁、風呂、台所の修理から造園、店舗の改装増改築、注文建築、新築と、住まいの修理全般から家の建築まで。

兵庫宮崎建築協同組合なんてむつかしい名前がついているけど工務店や大工さん、左官さんの組合のことで、この事務所はその窓口になっている。

電話で受けた用件を、それに適した組合員に巡し、設計、見積り施工という手順になる。申し込みは月に一〇〇件余り。だいたい大小とりまけて施工する工事は月に六〇件ほどという盛況ぶり。電話での相談にも応じており、ちよっとした「畳の焼けこげ」「台所のカビとり」などの暮らしの知識のアドバイスもしてくれる。増、改築工事は完工後一年、防水工事は十年の保証があり、見積りは無料とのこと。

また姫路にも支部があり（姫路市豊沢町89 電話（〇七九二）八五一三二八二）地域によって仕事を分けている。大工さんや左官さんのよく出入りする事務所らしく、入口にいづくものヘルメットがかけられているのが印象的だ。